

聖書：マタイ 14：13～21

説教題：ここに持って来なさい

日時：2019年8月11日（朝拝）

聖書の中にイエス様の奇跡はたくさん記されていますが、その中の代表的なものを一つ上げよと言われたら、皆さんは何をあげるでしょうか。おそらく一番多いのは、今日の箇所記されている「5千人の給食」ではないかと思います。調べて分かることは、4つの福音書すべてに記されている奇跡は、イエス様の復活を除いてこの5千人の給食だけであるということです。このことを通しても、この奇跡の重要性が改めて分かって来ます。以下、3つのポイントで見て行きたいと思います。

まず一つ目に見るのは13～14節です。13節に「それを聞くと、イエスは舟でそこを去り、自分だけで寂しいところに行かれた」とあります。「それを聞くと」というのは、前の箇所の領主ヘロデの言葉のことです。彼はイエス様の噂を聞いて、2節で家来たちにこう言いました。「あれはバプテスマのヨハネだ。彼が死人の中からよみがえったのだ。だから、奇跡を行う力が彼のうちに働いているのだ。」バプテスマのヨハネを殺したヘロデは、次にはイエス様にも手を伸ばさないと限らない。そこでイエス様は自分だけで寂しいところへ行かれました。これはもちろんヘロデを恐れたからではありません。これはイエス様が捕らえられ、十字架にかけられるべき「時」がまだ来ていないからです。イエス様は言うまでもなくその気ならヘロデを打ち負かすことができます。神の子として何かをしようと思えば、どんなことでもできます。しかしそういうことをするためにイエス様は世に来たわけではない。イエス様が来たのは、人々の身代わりに十字架上で死に、信じる人たちを死と滅びから救い出すためです。その「時」はまだあるために、イエス様は陰へと退いて行かれたわけです。そしてそれは同時に次の23節で見るように祈るためでもあったのでしょうか。ところがでした。何と群衆はそれを聞いてイエス様の後を追いかけて来ました。イエス様がガリラヤ湖を舟に乗って出発した時、どの方向に向かったかを見極めれば、どこにたどり着くか十分に予想できたのでしょう。人々はイエス様がたどり着くであろう場所に先回りしてやって来たわけです。そしてイエス様が到着した頃には、すでにそこに大勢の群衆が詰めかけていました。

もし私たちがイエス様だったらどうでしょうか。せつかく一人になって祈りと休息の

時を持ちたいと考えていたのに、それができない。多くの群衆を見てうんざりした顔をするでしょうか。それとも人々を見て、別のところへ行くために、舟を岸には着けず方向を変えて再出発するでしょうか。しかしイエス様はそうはなさいませんでした。14節にイエス様は「彼らを深くあわれんで、彼らの中の病人たちを癒やされた」とあります。ここにイエス様はどんな方であるかが示されています。イエス様はご自分がしようとしていることがあったのに、それは脇においてまずそこにいた人々を深くあわれんでくださるお方であった。「深くあわれむ」と訳されている言葉は、前にも9章36節に出て来ましたが、聖書の中ではイエス様あるいは神様にしか使われていない言葉です。そしてそれは「はらわた」あるいは「内臓」を意味する言葉からできています。つまり腸がよじれるほどの、あるいは内臓が揺れ動くほどの思いをもって彼らを見つめ、心を傾けてくださった。それは単なる「あわれみ」という言葉では表現し切れないので、「深くあわれんで」と訳されているのだと思います。イエス様はこのように私たちのことを深く心にかけてくださる方です。求める者を決して退けない。今日は忙しいから、後からまた来て！とは言わない。私たちの真の状態を深い目をもって見つめ、ご自身の内臓が痛むほどの思いをもって思いやっってください。そして恵み深いみわざをしてくださる。そういう方が私たちに与えられているのだ、父なる神がこのような救い主を私たちのところに送ってくださったのだ、ということをもまず心に留めたいと思います。

次に見たいのは、15～18節です。そうこうしている内に、時は夕方になりました。弟子たちはここで危機感を持ったようです。ここは人里離れたところでした。そんな場所に、21節に書いてあるように男だけで5千人、女、子どもを合わせたら1万人以上の人々がいたのでしょう。このまま時間が過ぎて暗くなってしまっは大変なことになる。そうなる前に群衆を解散させてください。そしてめいめいが村に行って自分の食べ物を買うことができるようにしてくださいとイエス様に頼みます。ところがイエス様は驚くべきことを言われました。何と、彼ら群衆が行く必要はない。あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい！と。ハ～？イエス様、それは一体どういうことでしょうか？と思わず問い返さずにはいられないような言葉をイエス様は語られました。平行記事のヨハネの福音書6章を見ると、弟子の一人のピリポがこう答えたことと記されています。「一人ひとりが少しずつ取るにしても、200デナリのパンでは足りません。」1デナリというお金は当時の一日分の給料に相当したそうですから、計算しやすいように1万円とすると、200デナリのパンとは200万円分のパンになります。そしてここに1万人集まっ

ていたとすると、一人当たり 200 円分のパンになります。今日で言えばパン 2 つになるでしょうか。ピリポはすぐそばんをはじいて、200 万円分のパンが買っても足りないのだから、これは無茶苦茶な話です！不可能な要求です！と答えたわけです。今日の箇所では、弟子たちはイエス様の言葉を受けて、「ここには 5 つのパンと 2 匹の魚しかありません」と答えました。ここにあるのはそれだけです。全体の必要を前にしてこれではどうしようもありません。不可能です。これが彼らの答えでした。

しかしイエス様は言われました。「それを、ここに持って来なさい。」先のイエス様のことば、「あなたがたが人々に食べ物を与えるためにどうにかしなさい」という言葉は、この 18 節のイエス様の言葉とセットで、その光の下で考えられるべきものだと思います。つまりイエス様は弟子たちが本当に男だけで 5 千人もの大群衆に食べさせることができるパンを自分たちの力で調達して来い！と言われたのではなかった。これは彼ら自身の力で何とか対処できるような状況ではありません。しかし今までイエス様とともに過ごし、イエス様をそばで見て来た者たちとして、イエス様に信頼するように！そしてイエス様に求めるように！と彼らを招くための言葉だったのではないのでしょうか。彼らはこれまでたとえばヨハネの福音書 2 章に記されているカナの婚礼の奇跡を体験していました。結婚式でぶどう酒がなくなって困った時、何がそこで行われたのでしょうか。イエス様の母マリヤがイエス様に求めると、イエス様は水をぶどう酒に変えられたことがありました。こんなにも素晴らしいぶどう酒をよくも最後まで取っておいた、と宴会の世話役が驚くほどの奇跡を行われました。とするなら、この状況でもイエス様なら何かをしてくださると考えても良かったのではないのでしょうか。たとえ自分たちの手元には 5 つのパンと 2 匹の魚しかなくても、そこから人々の必要を十分に満たす奇しいみわざをイエス様は行うことができるとの信仰を持って、イエス様に願い求めてもおかしくなかったのではないのでしょうか。

私たちもこのような難しい状況に直面する時があると思います。多くの必要、あるいは課題を前にして、自分の力はあまりに小さい。持っているものは少ないし、財力もない。またそばにいる人たちを見ても大きな期待は持てない。いわゆるマンパワーがない。そして置かれた環境も条件が悪い。これらのことを考えて、どうしようもありません。私たちには何もできません。すべては不可能です。そのように弟子たちと同じ否定的結論しか出せないように思うかもしれません。ところがイエス様が「あなたがたがこの状

況に対処しなさい」と言われる。イエス様、それはどういうことなのですか？何と無茶なことを私たちに言われるのですか？と食って掛かりたくもなる。しかしイエス様はそのための道をこのように示しています。「それを、わたしのところに持って来なさい」と。その小さなもの、あなたが意味がないと判断しているもの、そして何よりあなた自身を、ここに持って来なさい。そのようにイエス様の恵み深い手に差し出す時、そこからイエス様の素晴らしい御業が始まって行くということがここに記されているのです。

最後3つ目に注目したいのは19節以降の奇跡についてです。イエス様は群衆に草の上に座るように命じられました。それから5つのパンと2匹の魚を取り、天を見上げて神をほめたたえました。これしかありませんと神に文句を言ったのではなく、むしろ感謝したのです。そしてそれを割くとどうなったでしょう。何と次から次へとパンが増えて行きました。このところを、イエス様の生涯を描いた映画やビデオはどのように描写するのか、いくつかを興味を持って見たことがあります。まだ満足するものに出会ったことはありません。私が見たのは、イエス様が天に向かって感謝した後、その手を下すと、いつの間にかパンや魚が沢山入ったかごが2つ、3つと増える様子が映し出される映像とか、あるいはイエス様が感謝した後、イエス様は映し出されず、弟子たちがせつせと配る様子を描いたものなどです。私としてはイエス様の手の中でそれが増えて行く不思議な映像を見たいのですが、難しいでしょうか？

いずれにしろ、その結果は、人々がみな食べて満腹したということでした。とりあえずいくらかは口に入れたという程度でなく、皆がお腹いっぱいになることができました。人々は十分に満ち足りたのです。そして余ったパン切れを集めると12のかごが一杯になりました。これはおそらく12人の弟子たちがそれぞれ一つずつ持って集めたかごが、みな一杯になったということだと思います。この12弟子、そして12のかごは、イスラエルの12部族を象徴します。ですからこれはイエス様は神の民の必要を豊かに満たし、養ってくださる救い主であるということです。この辺鄙なところ、何もないような寂しいところでも、イエス様はこのような奇跡的なわざを行われました。神が私たちに与えてくださった救い主はこのようなお方であるということです。

私たちはこの記事を自分に当てはめてどうでしょうか。私たちも様々な問題、課題にぶち当たる時があると思います。その行き詰った状況で、自分と自分が持っているもの

を見渡して、これではどうしようもありません。これでは何もできません。すべては不可能です！と否定的結論しか出せないかもしれません。しかしイエス様は、あなたがその状況で何とかしなさい、あなたがそのことをしなさいと言われる。私たちとしては、イエス様、どういうことでしょうか。あなたは何と無茶なことを私たちに要求されるのでしょうか、と口を尖らせたくなるかもしれません。しかしそんな私たちにも、イエス様は「それを、ここに持って来なさい！」と招いてくださっている。もちろん、そうすればすべて私たちの思う通りにうまく行くというわけではありません。これは何か簡単に便利な祝福の方法ということではありません。しかしイエス様は神が私たちに与えてくださった救い主です。神から離れてしまったために様々な悲慘と苦しみとに陥っている私たちを救い、祝福してくださる救い主です。色々な課題を前にして意気消沈し、暗い顔をしている私たちに、今日の御言葉は、このイエス様のもとに行くように！その方に祈り求めるように！と招いています。その際、私たちはすでに自分に与えられているものや、自分が持っているものを軽蔑してはなりません。これでは意味がない、何の役にも立たないと言ってはならない。たとえ小さなものでも、あるいはそのように小さな自分自身でも、「それを、ここに持って来なさい」と言われるイエス様の言葉に導かれてイエス様の御手に差し出す。そこからイエス様は私たちの想像をはるかに超える大きな御業をしてくださるのです。

このイエス様の言葉に耳を傾けて、私たちは自分自身と自分の持てるものとをイエス様のところへ、その御手へ、祈りを通して持って行きたいと思います。つぶやくのではなく感謝して、イエス様の手差し出す者でありたい。その時、イエス様はご自身の手の中で私たちの救い主としての力を発揮して豊かに私たちを満たしてくださる。この憐れみ深い主によって豊かに養われ、満たされる神を信じる民の幸いと喜びに歩んで行きたいと思います。